MUSEUM EYES

ミュージアム・アイズ

Vol. 46

2006 Autumn

MEIJI UNIVERSITY MUSEUM

足形・手形付土製品
（青森県三戸町目時出土　三戸町教育委員会蔵　実物大）
縄文時代後期につくられた、乳幼児の足を粘土の板に押し付けて焼いた土製品です。裏側には手形がつけられており、縄文時代の人々の子どもに対する思いの深さを偲ばせる資料のひとつです。今回の特別展では、このような子どもの痕跡が残る考古資料の数々から、社会における子ども像の変化をさぐります。

◆特集◆

明治大学博物館主催

特別展 掘り出された〈子ども〉の歴史

―石器時代から江戸時代まで―

2006.10/7(土)～12/10(日)

◆谷川章雄氏（早稲田大学人間科学学術院教授）インタビュー
◆収蔵室から
◆M2カタログ
◆来た・見た・聞いた明治大学博物館
◆博物館友の会から
友の会分科会⑥“草生水の会”研究会

明治大学博物館

特集 掘り出された＜子ども＞の歴史

－石器時代から江戸時代まで－

2006. 10/7(土)〜12/10(日)

明治大学博物館特別展示室（明治大学アカデミーコモン地下1階）

入場料　明治大学学生・教職員は無料（リバティ・アカデミー会員、明大カード会員、明治大学博物館友の会会員、高校生以下の児童・生徒、愛の手帳・身体障害者手帳をお持ちの方は身分証・手帳の提示で無料）　一般300円

私たちにとって大切な存在である、＜子ども＞。
長い歴史の中で、子どもたちはどのような姿で現れ、また大人や社会はその存在をどのようにとらえていたのでしょうか。今回の特別展では、土の中から発掘された骨や土器など考古学の資料を手がかりとして、日本列島における子ども像の移り変わりについて考えます。

まだ土器がない時代には、出土する骨が当時の子どもを知る唯一の手がかりになります。日本列島ではその痕跡はわずかですが、海外では事例がいくつかみられます。5万年以上前の遺跡には、子どもの埋葬と考えられるものがあります。胸付近で見つかった小さな石器は、死に際して供えられたものかも知れません。

◀埋葬の可能性がある5万年以上前の子どもの人骨（レプリカ　シリア・デデリエ洞窟　当館蔵）

一方、縄文時代に入ると、子どもにまつわるさまざまな土製品がつくられます。墓に入れられた子どもの手形や足形をおしつけた土製品（表紙）は、世界的に見ても珍しいもので、当時の子どもたちのぬくもりを感じさせる資料です。また、ムラのマツリに使われた土偶は、おなかがふくらみ、妊娠線が描かれるものもあり、明らかに女性が妊娠している様子を表しています。出産に関係する土偶や土器も見られることから、縄文時代の人々にとって、子どもの誕生と成長がいかに重要なことであったのかがわかります。高い死亡率と、食料供給が自然環境の変化に左右される厳しい環境が、子どもへの意識の高まりをもたらしたのでしょうか。

妊娠を示す土偶（千葉・江原台遺跡出土　当館蔵）▶

明治大学のリバティ・タワーの地下には、中坊氏という江戸時代の旗本の屋敷跡がありました。そこからは、子どもの健康な成長を祈るため屋敷内で人がひんぱんに通る場所に出産時に出る胎盤を入れて埋めた胞衣（えな）容器が数多く出土しています。また、大量に見つかった土人形やままごとの道具、泥めんこなどから、子どものために作られたおもちゃの普及が進んでいたことがわかり、現代に通じる「学び、遊ぶ」存在としての子ども像が見てとれます。

▲江戸時代のおもちゃ（明治大学記念館前遺跡出土　当館蔵）

このように、考古学の資料からは、長い歴史の中で、大人や社会の子どもに対する扱いにさまざまな変化があったことがうかがえます。特に、縄文時代における子どもの誕生と成長に対する深い願い、そして江戸時代の手厚いいつくしみは、日本列島に生きてきた人々が、いかに子どもを大切に思ってきたのかを如実に物語っています。少子化を迎えた今、私たちが改めて子どもと向き合うための何らかのヒントがそこにあるかも知れません。ぜひ特別展の会場で、考古資料にこめられたメッセージを探してみてください。

関連イベント

1 開幕記念特別講演会・絵画資料から読み解く子ども史ー中世から近世へー

歴史学における子ども研究の第一人者である黒田先生に、絵画資料から見た中世と近世における子ども観の変化についてお話しいただきます。

講　師：黒田日出男氏（東京大学名誉教授・群馬県立歴史博物館館長・立正大学文学部教授）
日　時：2006年10月6日（金）14:00〜15:30
会　場：明治大学アカデミーコモン2階会議室
定　員：200名（要申し込み）
申し込み・問い合わせ先：明治大学博物館事務室　Tel:03-3296-4448

2 リバティ・アカデミー第40回博物館公開講座「考古学ゼミナール」考古学から見た歴史のなかの子どもと家族・社会

多彩な講師陣を迎え、長い日本列島の歴史において、子どもがどのように家族や社会のなかに位置付けられてきたのかを、考古学の視点から考えます。

講　師：近藤 修氏（東京大学助教授）、山田 康弘氏（島根大学助教授）、小杉 康氏（北海道大学助教授）、谷川 章雄氏（早稲田大学教授）、忽那 敬三氏（当館学芸員）
回　数：全5講（10月20日から11月3日を除く毎週金曜日18:00開催）
定　員：200名（要申し込み）
受講料：5,500円（リバティ・アカデミー会員でない方は入会金3,000円が必要です）
申し込み・問い合わせ先：明治大学リバティ・アカデミー事務局　Tel:03-3296-4423

お申し込みは10月末まで

特別展 学生受付ボランティア募集中!!

詳しくは明治大学博物館事務室
TEL 03-3296-4448
までお問い合わせください。

特別展サポート・イベント

コレクション展 開催中!
「伝統工芸にみる〈子ども〉の姿」

商品部門常設展示にて

郷土玩具を中心に、子どもをモチーフとした伝統的工芸品を紹介しています。11月26日まで。会期中、展示のガイドツアーを実施します。事前申込不要。
10月11日（水）14:00・10月27日（金）15:00
11月 8日（水）14:00・11月24日（金）15:00

谷川章雄氏（早稲田大学人間科学学術院教授）インタビュー

谷川 章雄氏にきく

—「掘り出された＜子ども＞の歴史」展 開催にあたって

谷川 章雄　たにがわ・あきお
早稲田大学人間科学学術院教授。1953年、東京生まれ。早稲田大学大学院文学研究科史学（考古学）専攻博士課程、教育学部助手、人間科学部専任講師・助教授を経て現職。近世都市江戸をテーマとする考古学研究の第一人者。武家屋敷・町屋・墓地などから発掘される遺構や遺物を素材として、江戸の生活史・社会史に取り組む。

Interview

—まず、考古学から子どもを考えるという展覧会が実現したことについて、ご感想をお聞かせください。

考古学でのこうした展示は記憶にないですね。考古学でも子どもの世界が描けるんだ、ということが期待されるようになればよいと思います。

—なぜ、子どもに着目することがあまり無かったのでしょうか？

歴史学が政治史中心で展開してきたということが大きいんじゃないでしょうか。文字で書かれた記録の中では、女性や子どもは主役として登場しづらい。社会史・心性史が注目されるようになってきて、ようやく子どもがテーマになり得るようになってきた。考古学もその影響を受けているということなんじゃないかと思うんです。歴史系の博物館では展示を考えるとき、時代とか地域でくくることが多いわけだけど、そうじゃなくて、時代・地域を貫く主題を設定してゆく、例えば女性史とか、老人の歴史もあるけど、そういったものがようやく成り立ち得るようになったと思います。

—展示の中には、明治大学の記念館前遺跡から数多く出土した胞衣容器があります。

胞衣（えな＝胎盤）を容器に入れ、土に埋めて子どもの成育を祈るというのは、古代・中世の貴族・武家の習俗だったわけですよね。それが、近世になって、特に都市で一般の人々の間に降りてくる。時期的には18世紀に入る頃で、元禄年間は育児書の普及の時期でもあるし、その中に胞衣の埋め方も書いてある。文字の力だけではなくて、習俗自体が下に降りていった。そこでは、子どもに対する観念の変化があったんだろうと思います。以前は捨てていた胞衣を埋めるようになったというのは、子どもに対する強い関心が出てきたということ。子どもを守り育てていかなければいけない、家の永続の担い手としての子ども、という意識が上の階層から強くなってきたんだろうと思います。

—土人形などの玩具が墓の副葬品となることもあるそうですが。

副葬品に性別・年齢を反映したものが多くなるというのも18世紀以降で、玩具が子どもの持ち物として墓に入ってくる。玩具には二通りあって、一つは親が買って与えるもの、もう一つは子どもが小遣い銭を握りしめて買うものですね。大人が買い与えるものが多くなるのは、子どもに対する観念の変化と考えてよいのではないかと思います。

—子どもに対する考え方について、近世と現代の間で共通する点、しない点、遺物を通してどのようなことがわかりますか？

今の我々にとっての子どもに対する考え方の出発点に近いようなものが江戸時代にあっただろうとは言えるが、一方で大きな断絶もあると思います。圧倒的な違いは階層差ですよね。武家と都市下層民が同じような子どもに対する考え方をもっていたかというと、必ずしもそうとは言えない。もう一つは、例えば胞衣の問題。今は胞衣納めの習俗はない。産育をめぐる呪術的な部分は切れてしまっていると言えます。また、玩具も江戸時代には遊び道具であると同時に、まじないにも用いる呪術的な道具であったわけですね。

—今後、考古学において子ども研究を進めるにあたっての課題は何でしょう？

時代や階層性によって子ども観が相当違うので、そこがどの程度まで描けるのかが重要なテーマだと思います。子どもはその時々の社会的な存在なので、今の観念をそのまま過去に投影させるだけでは通用しないでしょうね。

—ありがとうございました。

文部科学省委託事業 地域子ども教室 受託決定

2004年度に続き、「地域子ども教室」を開催することになりました。毎週火曜・木曜・金曜の開館時間中、地下2階の常設展示室に畳敷きのコーナーが設置されます。石器や縄文土器、伝統的工芸品をテーマとする体験学習やクイズ、絵手紙などの工作、カラクリ人形、ワークシートなど、博物館に楽しく接することのできるプログラムを用意しました。気軽に立ち寄ってお楽しみいただけます。皆さんが描いた絵手紙は、ミュージアム・ショップで展示・紹介しています。実施は来年2月まで。

親子向けバックヤードツアーを実施

8月18日と24日、非公開の博物館の裏側を見学するイベントとして「夏休み小学生・親子向けバックヤードツアー」が行われました。当初は、18日午後のみの開催予定でしたが、多数の応募をいただき2日間に合計4回のツアーを実施しました。ハイライトは、貴重な資料を次世代に継承する巨大タイムカプセルといえる収蔵庫の見学です。ここでは原物の資料に触れたり、電動式集密書架や重い資料を昇降させるリフトの操作にも挑戦しました。

公開特別講義「伝統的工芸品の経営とマーケティング」を開催

7月11日、ゲストとして赤津焼（愛知県瀬戸市）の産地から加藤裕重氏をお迎えし、髙橋昭夫商学部教授、福田康典同専任講師、外山徹博物館学芸員と大学院生・学生代表によるパネル・ディスカッションがおこなわれました。会場からの発言もおりまぜながら、日本最古の歴史を持つ伝統的陶器の製造・販売の現状と課題について活発な質疑応答がなされました。他学部の学生・一般来場者を含めて330名が参加しました。今後、大学院商学研究科との連携による教育研究プロジェクトとしてシリーズ化の予定です

黒耀石研究センターだより　2006年夏

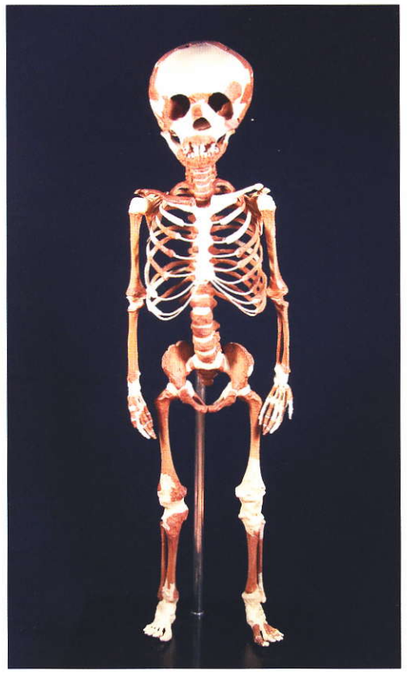
黒耀石研究センターのある長野県長和町で、去る6月30日に、黒耀石研究を核とする本学と長和町との社会連携事業を推進する協定が結ばれました。そして、8月27日には、長和町（2005年10月合併）の合併記念イベント「第2回黒耀石ふるさとまつり」が開催されました。同イベントでは、納谷廣美学長の挨拶につづき、明大マンドリンクラブOB会による演奏会があり、当館友の会の方々をはじめ、参加した200人以上の町民に本学と長和町の連携がアピールされました。戸沢充則明大名誉教授（考古学）による記念講演では、黒耀石鉱山と思われる新しく発見された遺跡の紹介にはじまり、黒耀石と中山道からなる個性ある町の歴史遺産を未来に継承する理念が、熱く語られました。

収蔵室から

デデリエ洞窟出土 ネアンデルタール人の幼児化石人骨レプリカ

2006年10月7日より、今年度の明治大学博物館特別展「掘り出された＜子ども＞の歴史−石器時代から江戸時代まで−」が開催されます。今回の“収蔵室から”も、特別展にちなみ、出展資料の中からシリア・デデリエ洞窟出土のネアンデルタール人の幼児化石人骨レプリカについてご紹介します。

デデリエ洞窟は、シリアの首都ダマスカスから約400km北、死海地溝の北端に位置します。西アジアを南北に走る死海地溝帯は、東アフリカを南北に走る大地溝帯と連結しており、どちらも初期人類遺跡の宝庫といわれています。大地溝帯は主として人類の起源と、人類が進化をくり返した地であり、死海地溝帯は初期人類がユーラシア大陸に拡散していく際、最初に足を踏み入れた地です。



デデリエ洞窟の発見は世界中の専門研究者たちの関心を集めました。研究グループの組織構成も考古学・人類学はもとより、工学、理学、医学、美術解剖学というように多岐にわたっていることからも、いかに学際的に注目されていたか、ということが窺えます。それほどに脚光を浴びていた遺跡と化石人骨とは、一体どのようなものだったのでしょうか。

国際日本文化研究センターとシリア考古総局を中心とした調査隊によるデデリエ洞窟の一号人骨の発見は、今からおよそ10年前、1993年8月にさかのぼります。洞窟は奥行きが60m、最大幅が40mを測る巨大なもので、加えてチムニー（煙突）を持つという特徴もあります。ちなみに洞窟の名前は入口とチムニーがあることから調査隊により命名されました。“デデリエ”はクルド語で“ふたつの入口”という意味を持っています。この洞窟から発見されたのが、中期旧石器時代（約20〜4万年前）に生存していたネアンデルタール人の化石人骨です。

合同調査隊の調査研究により、身長は約82cm、年齢は歯の萌出・形成程度などから、およそ二歳弱の幼児と推定されました。

ネアンデルタール人の骨はこれまでにも数多く出土しています。しかし、幼児骨は成人骨と比べるともろく小さいため、デデリエ出土の幼児化石人骨のように、全身骨格の骨がほぼ揃い、かつ保存状態が良好なものは前例がありませんでした。また、生前の骨格部位を正しく保っていたことから、意図的に埋葬されたことをうかがわせる好例として貴重な資料となりました。

ところで、人類学の分野では新人（現生人類）の誕生を説明する仮説がふたつあります。人類はアフリカで生まれ世界に広がったとする一地域進化説と、各地域でそれぞれに進化した、という多地域進化説です。ふたつの人類進化説に、ふたつの土地の役割、そしてふたつの入口を意味する“デデリエ”…。みなさんも人類誕生の起源や進化、祖先のルーツに思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

（佐藤 紘子）

M2カタログ

M2 グッズ

ミュージアムショップ「エムツー」で販売しているグッズを紹介するこのコーナー。第7弾は「ニュルンベルクの鉄の処女」グッズをご紹介します。

前号でご紹介した「ニュルンベルクの鉄の処女」のTシャツは、おかげさまで完売となりました。しかし、鉄の処女グッズはTシャツだけではありません。他にも、文具やキーホルダーなど全部で6種類のグッズをご用意しています。

★売り上げBEST3（6月〜8月）★ 〜衣類編〜

1位	Tシャツ（ニュルンベルクの鉄の処女）	1,700円
2位	Tシャツ（十手）	1,500円
3位	エプロン	3,200円

価格

一筆箋……400円
レターセット……400円
ペンケース……2,400円
ポストカード……90円
キーホルダー……850円
コースター……1,100円

来た・見た・聞いた明治大学博物館

メディア掲載一覧

資料写真掲載

○資料掲載【江戸町奉行所同心　真鍮銀流し十手】
『日本の歴史を見る　第7巻』天下泰平と江戸の賑わい　世界文化社
○資料掲載【内藤家文書「五十三次ねむりの合の手　鮎やな」】
『国文学解釈と鑑賞』2006年8月号　至文堂
○資料掲載【茨城県舟塚古墳出土建物埴輪】▶写真
石野博信『古墳時代を考える』　雄山閣
○資料掲載【「瞽女掟書」】他
ジェラルド・グローマー『瞽女と瞽女唄の研究』　名古屋大学出版会
○資料掲載【「伊勢国高郷帳」（慶安元年）】
【「近江国郷帳」（正保3年）】
【「陸奥国棚倉・岩城・中村郷村高辻帳」（正保4年）】
【「但馬国山名領郷村高帳」（正保2年）】
【「石見国古田領郷帳」（正保4年）】
和泉清司『近世前期国別郷村高と領主支配−正保の国絵図と郷帳を中心に−』　岩田書院
○資料掲載【千葉県曽谷貝塚・姥山貝塚出土品　集合写真】
【千葉県天神前遺跡第2号再葬墓検出状況写真】
『千葉県の歴史　通史編　原始・古代1』　千葉県
○資料掲載【「時世のぼり凧」】
『ビジュアルNIPPON江戸時代』　小学館
○資料掲載【「服忌令」】
『週刊日本の100人　40号　徳川綱吉』　デアゴスティーニ・ジャパン
○資料掲載【鉄製目明し十手】
朝日ビジュアルシリーズ『週刊　藤沢周平の世界　第6号』　朝日新聞社
○資料掲載【群馬県岩宿遺跡出土石器】
『にっぽん探検大図鑑』　小学館
●資料放映【ニュルンベルクの鉄の処女】
「ザ・チーター」　TBSテレビ　2006年5月31日
●資料放映【「笞打の図」（『徳川幕府刑事図譜』）】
「超歴史ミステリーロマン“大奥”完全解明SP」（再放送）
テレビ東京　2006年6月30日
●資料放映【「公家衆諸法度」】
「午後は○○おもいっきりテレビ」内「きょうは何の日」コーナー
「元号法が成立した日」　日本テレビ放送網　2006年6月6日
●資料放映【「地方測量之図」】
「東京日和」　日本テレビ放送網　2006年5月20日
●資料放映【「御様の図」（『徳川幕府刑事図譜』）】
「開運!なんでも鑑定団」　テレビ東京　2006年8月8日

「茨城県舟塚古墳出土建物埴輪」

館紹介等の取材・撮影・掲載
（雑誌・ラジオ・ウェブサイト）

◇掲載【明治大学博物館紹介】
『螢雪時代』2006年7月号　旺文社
◇掲載【「夏休み小学生・親子向けバックヤードツアー」紹介】
『私立中高　進学通信』　エデュケーショナルネットワーク
◇掲載【「夏休み小学生・親子向けバックヤードツアー」紹介】
『広報千代田』7月20日号　千代田区
◇掲載【明治大学博物館・刑事部門紹介】
『月刊ソトコト』9月号　木楽舎
◇掲載【明治大学博物館紹介】
『メンズブランド』9月号　成美堂出版
◇掲載【明治大学博物館・刑事部門紹介】
『東京ウォーカー』17号　角川クロスメディア
◇掲載【明治大学博物館紹介】
共同通信社配信
◇掲載【明治大学博物館・刑事部門紹介】
『読売新聞』7月26日号　読売新聞社
◇掲載【「夏休み小学生・親子向けバックヤードツアー」紹介】
『千代田区イベントカレンダー』　千代田区文化芸術協会
◇掲載【明治大学博物館紹介】
『月刊いけ花RYUSEI』　龍生華道会
◇掲載【「レオナルドのもう一つの遺産」展紹介】
『広報千代田』8月20日号　千代田区

団体見学の記録 2006年6月〜2006年8月

【一般】ゴールドとどろき（37名）・NHK文化センター「下町あるき」講座（27名）・読売カルチャーセンター京葉“お江戸でござる”（9名）・明治大学国際交流センター事務室（24名）・明大桃園会（12名）・遊歩会（13名）・横浜歴史散歩の会（27名）・文京ふるさと歴史館友の会（40名）・法政大学図書館事務部（7名）・いきいき倶楽部（7名）

【小・中学校】愛知県豊橋市立高豊中学校（5名）・愛知県刈谷市立朝日中学校（5名）・お茶の水小学校2年生（12名）・田園調布学園中等部（29名）・東京都あきる野市立一の谷小学校6年生（37名）・品川区立荏原第2中学校2年生（23名）・明治大学付属中野中学校（27名）

【高等学校】桐生第一高等学校（19名）・藤嶺学園藤沢高等学校（15名）・和洋九段女子高等学校（20名）・静岡県静岡市立清水商業高等学校（64名）・岡山県立新見高等学校（8名）・聖望学園高等学校（43名）・広島県立尾道北高等学校（5名）・吉祥寺女子中学・高等学校（10名）

【大学・大学院】明治大学大学院経営学研究科（23名）・明治大学法学部「英会話」受講者（16名）・専修大学法学部「日本法制史」受講者（380名）・専修大学憲法・戦後史ゼミナール（17名）・東洋英和女学院大学坪井龍太ゼミナール（15名）・早稲田大学教育学部博物館実習G（20名）

友の会分科会⑥“草生水の会”研究会

博物館 友の会から

草生水（クソウズ）の言葉をご存知でしょうか？多くの方々にとっては聞いたことがないかもしれません。昔は臭い水又は臭水（くそうず）とも呼ばれ、それは「石油」を意味した名称です。石油独特のくさい臭いからこの名前が付けられたようです。現在でも新潟県、山形県、秋田県等で字（あざな）などの地名として残されています。また、「黒川」という地名も同様に数多く残されていますが、一説には石油（黒い水）が流れ出ていた地域であると言われています。

石油（天然ガスを含む）は現在、私達の生活になくてはならない存在ですが、その事実、例えば、石油はどうして出来るの？いつごろからどんな風に使われてきたの？など、これらを知る人は少ないのではないでしょうか。私達は特に人類と草生水（石油）の関わりについて先史時代から現在までの歴史と文化を探求してみようと考えています。

人類と石油の関わりの歴史はいつ頃から始まるのか？日本国内では縄文時代早期（約7,000年前）に石鏃や石槍等の柄の接着剤として天然アスファルトが利用されています。おそらく世界中で最も早く利用されたのではないでしょうか。その昔エジプトでミイラの保存に天然アスファルトが利用されていますが、時代的にはその後と考えられています。長い縄文時代の期間に利用されたアスファルト遺物の分布やアスファルトの流通を探求することも本会のテーマのひとつです。

草生水の文字としての記録は日本書紀に見られる天智天皇への「燃える水燃える土」献上（668年）が始まりで、それ以降はしばらく明らかでなく、江戸時代後期にようやく「燃水」や「草生水」の名称が登場します。その頃のいろいろな文献（例えば、「北越奇談」や「庶物類纂」）を捜してその歴史を探ってみたいと考えています。文字記録でまだ確かでない中世の頃には、発掘調査で得られた考古遺物の存在から草生水が利用されていたことがわかってきました。例えば、8世紀頃、秋田市羽白目遺跡では烽火に用いられたと推定され、新潟県新発田城遺跡（室町時代）からアスファルトが付着した土師器が出土、灯火として利用されていました。まだまだ各地でいろいろな利用法があったかもしれません。各地の発掘調査報告書を調べる事も楽しみの一つです。

更に、天然アスファルトは石油（草生水）の揮発成分が無くなった粘着性のある固体ですが、その天然アスファルトや草生水（石油）の今の採掘地（油・ガス田）やその過去の跡地等の見学、石油及びガスに関する博物館や資料館を訪問し、現在までの歴史を通して「草生水（石油）」の理解を深めていきたいと思っています。

本研究会は発足して1年足らずですが、急がず、慌てず、幅広くテーマをとらえて、進めていきたいと考えています。興味のある方の参加をお待ちしております。例会は不定期になっていますので、ご連絡をいただければ幸いです。

［連絡先］〒101-8301 千代田区神田駿河台1-1
明治大学博物館友の会
分科会　「草生水の会」研究会
世話人　佐々木　榮一

博物館案内

【開館情報】

開館時間　10:00～16:30（入館16:00まで）

休館日　夏期休業日（8/10～8/16）
冬期休業日（12/26～1/7）
8月の土・日に臨時休館があります。

※開館時間・休館日には変更の場合があります。

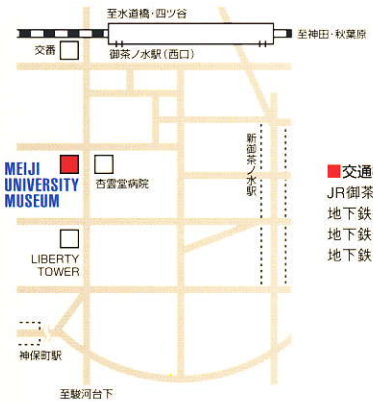
観覧料　常設展無料
特別展は有料の場合があります。

【図書室ご利用案内】

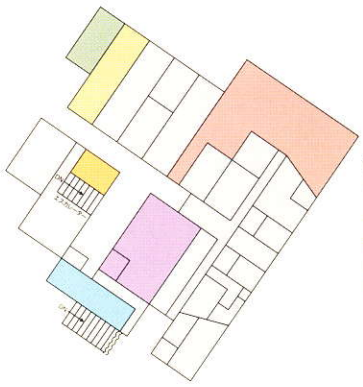
開室時間　月・金　10:00～18:30
（8、9、2、3月は10:00～16:30）
火～木　10:00～16:30
土　10:00～12:30

閉室日　日曜・祝日・大学が定める休日

※図書室はどなたでもご利用いただけます。
※蔵書は原則閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



■交通機関
JR御茶ノ水駅（中央線）から徒歩5分
地下鉄御茶ノ水駅（丸の内線）から徒歩8分
地下鉄新御茶ノ水駅（千代田線）から徒歩8分
地下鉄神保町駅（都営新宿線・半蔵門線）から徒歩10分



施設案内（B1）
- 図書室
- 体験学習室
- 博物館教室
- ミュージアム・ショップ
- 特別展示室
- 大学史展示室

編集後記

今年も特別展の秋がやって来ました。4頁の谷川先生のインタビューで印象に残ったのは、子どもは社会的な存在であるという点です。昨今、子どもをめぐる様々な事件が新聞紙上を賑わしていますが、それの意味するところは何でしょうか。展示には、子どもに関連する考古資料がかつてないスケールで大集合します。どうかお見逃しなく。（と）

MUSEUM EYES ミュージアム・アイズ　2006 Autumn　Vol. 46
明治大学博物館　MUSEUM EYES（ミュージアム・アイズ）第46号　〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1
【TEL】03-3296-4448【ホームページ】http://www.meiji.ac.jp/museum/
2006年10月2日発行　<印刷>株式会社サンヨー　<第46号製作スタッフ>外山徹（編集）・佐藤紀子・竹原万雄